

パспа文字の由来—「j」など

吉池孝一

—

パспа文字の子音の一覧表とそのローマ字翻字を示すと次のようである(注1)。

1  g	2  k*	3  k	4  ŋ				
5  d	6  t*	7  t	8  n	9  l			
10  b	11  p*	12  p	13  m	14  f ( f1奉, 15  f2非敷)	16  v		
17  j	18  č*	19  č	20  ñ	21  ś ( ś1禪, 22  ś2審)	23  ž		
24  j	25  c*	26  c	27  s	28  z			
29  h	30  h (31  h1匣,  h2曉)	32  γ	33  y ( y1喩, 34  y2幺)				
35  r	36  r	37  q					

これら子音文字の大部分は、チベット文字の丸みを帯びた部分を角ばらせ、さらに多少の変形を加えて作ったものとみなすことができるけれども、幾つかの文字の由来については検討が必要である。そのうち、「歯茎の破擦音」に相当する 24 、25 、26  について考えてみたい。なお、チベット文字、パспа文字、デーバナーガリー文字にはそれぞれのローマ字翻字法があるけれども、議論の便宜のため、これ以後は漢語を含めそれぞれの言語の「後部歯茎～硬口蓋の破擦音および鼻音」と「歯茎の破擦音」を以下のように表記する。もっとも「後部歯茎～硬口蓋の破擦音および鼻音」「歯茎の破擦音」などと言っても、それぞれの言語にはそれぞれの音声特徴があったはずであり単純に横並びに表記することには慎重であらねばならないが、しばらくは目をつぶっていただきたい。

	後部歯茎～硬口蓋の破擦音および鼻音	歯茎の破擦音
有声	dž	dz
無声帯気	tšh	tsh
無声無気	tš	ts
	ñ	

そこで、「後部歯茎～硬口蓋の破擦音」に相当するパспа文字 17  dž、18  tšh、19  tš と、「歯茎の破擦音」に相当するパспа文字 24  dz、25  tsh、26  ts と、チベット文字を並べて示すと次のようである。

	チベット文字	パスパ文字
後部歯茎～硬口蓋の破擦音		
有声	ཇ dz	17 ཇ dz
無声帯気	ཇ̣ tʃh	18 ཇ̣ tʃh
無声無気	ཇ̥ tʃ	19 ཇ̥ tʃ
歯茎の破擦音		
有声	ཇ dz	24 ཇ dz
無声帯気	ཇ̣ tʃh	25 ཇ̣ tʃh
無声無気	ཇ̥ tʃ	26 ཇ̥ tʃ

一見するだけで、パ 17 ཇ dz、18 ཇ̣ tʃh、19 ཇ̥ tʃ は、チ ཇ dz、ཇ̣ tʃh、ཇ̥ tʃ の丸みを帯びた部分を角ばらせ、さらに多少の変形を加えて作ったものとわかるけれども、パ 24 ཇ dz、25 ཇ̣ tʃh、26 ཇ̥ tʃ の由来をチベット文字に求めるのは不可であることは了解されよう（これよりチベット文字を「チ」、パスパ文字を「パ」、デーバナーガリー文字を「デ」と省略表記する場合がある）。そこで、これらの字形の由来をデーバナーガリー文字に求める説があらわれた。橋本萬太郎 1967（注 2）と中野美代子 1971（注 3）である。以下、この両説を紹介する。もっとも、両説に対して否定的なことを言わざるを得ず、さりとして代わりの妙案もない。ただ一つだけ、パスパ文字の「ཇ̣」と「ཇ̥」の間には派生関係がある」という案を提出するにとどまる。総じて生産的でない一文となってしまったけれども、字形の由来は様々な研究の出発点でもあるので、わかるところまでは明らかにしておきたい。

二

この問題に入る前に、破裂音・破擦音においてパスパ文字とモンゴル語音と漢語音がどのように対応するかということ、服部四郎 1946（注 4）により確認しておきたい。パスパ文字には、有声、無声帯気、無声無気という三種の対立がある。この三項対立の子音文字に対して、二項対立のモンゴル語音、二項対立の北方の漢語音（大都音）、三項対立の伝統的な漢語音（臨安音）、がどのように対応するかをみると以下のようなのである。説明の便宜のため、幾つかの破裂音・破擦音のグループを *dž, tʃh, tʃ* で代表させる。

パスパ文字	モンゴル語	漢語大都音	漢語臨安音
dž	dž	tʃ	tʃ
tʃh	tʃh	tʃh	tʃh
.....			
tʃ			dž

元代北方の漢語音である大都の音では、すでに濁音 **dž** は無声化し、平声という声調で無声帯気音 **tšh** となり、それ以外の声調で無声無気音 **tš** となっていた。有声音 **dž** はすではない。そのため、大都音の **tš** をモンゴル語の **dž** に対応させ、大都音の **tšh** をモンゴル語の **tšh** に対応させる習慣が確立した。これをパスパ文字で表記するばあい、前者に有声音のパ **dž** を当て、後者に無声帯気音のパ **tšh** を当てた。このような習慣があったため、後に南方の臨安の雅音 (**tš**・**tšh**・**dž** のような三項対立があったと想定する) をパスパ文字で表記するに際し工夫が必要となった。臨安の有声音 **dž** は、すでに確立していた大都音とモンゴル語音との子音対応の習慣から外れるものであったため、チベット文字の無声無気音に由来するパ **tš** を当てて表記した。その臨安の音が、パスパ文字で漢語を表記する際の正式な漢語音として採用されたため、パスパ文字の有声音 **dž** に漢語の無声無気音 **tš** が対応し、パスパ文字の無声無気音 **tš** に漢語の有声音 **dž** が対応するという一見錯綜した関係が生じた。

「臨安の雅音」の性格がどのようなものであったか。実際に有声音を含む三項対立の子音を持っていたのか、それとも韻書や韻図など伝統的な音の枠組みに従っただけなのかなど議論の余地はあるけれども、大筋としてこのようなことであったとするとパスパ文字と漢語の対応をうまく説明することができる。

三

このような錯綜した関係がパスパ文字と漢語との間にあるということを前提として、パ 24 **𑖇 dz**、25 **𑖈 tsh**、26 **𑖉 ts** の由来について考えてみる。これらの文字は、その字形からみて、チ **ᑦ dz**、**ᑦ tsh**、**ᑦ ts** (**ᑦ dž**、**ᑦ tšh**、**ᑦ tš** の右肩に「ひげ」を付けたもの) によるとは考えられず、他に由来を求めなければならない。橋本萬太郎 1967 と中野美代子 1971 は、サンスクリット語を表記したデーバナーガリー文字にパスパ文字の由来を求めた。両者の考えの拠り所は羅常培 1932 (注 5) にあるので先ず羅説を簡単に紹介する。

羅氏は、サンスクリット語に対応するデーバナーガリー文字とその音訳漢字の対照表を提示し、仏典の漢字音訳の法には北インドの所謂「北天系」の訳経僧のもの、中インドの所謂「中天系」の訳経僧によるものがあるとした。中天系は **𑖇 dž**、**𑖈 tšh**、**𑖉 tš** を後部歯茎～硬口蓋の破擦音 **dž,tšh,tš** の漢字で音訳し、北天系は同じ **𑖇 dž**、**𑖈 tšh**、**𑖉 tš** を歯茎の破擦音 **dz,tsh,ts** の漢字 (注 6) で音訳した。この違いをサンスクリット語の方言差とみる。それで、チベット語に訳された仏典をみると、**𑖇 dž**、**𑖈 tšh**、**𑖉 tš** に相当する音を含む人名や陀羅尼は、チ **ᑦ dž**、**ᑦ tšh**、**ᑦ ts** ではなく、チ **ᑦ dz**、**ᑦ tsh**、**ᑦ ts** で表記されている。これよりチベット人はかつて北天系の音により仏典の翻訳を行ったとした。

こうしてチ **ᑦ dz**、**ᑦ tsh**、**ᑦ ts** と **𑖇 dž**、**𑖈 tšh**、**𑖉 tš** はつながりをもつこととな

った。

四

橋本 1967 は、羅常培 1932 が掲げたデーバナーガリー文字の一部と由来不明のパスパ文字が類似していることを認め、両者をつなぐ音訳漢字の解釈を試みたのであろう。その主旨は以下のとおりである。

デーバナーガリー文字		パスパ文字	古漢語
𑖇 ṅ	→	𑖇	dz
𑖈 dž	→	𑖇	tsh
𑖉 tš	→	𑖉	ts

モンゴル語の固有語には歯茎破擦音 dz,tsh,ts は無い。歯茎破擦音のパスパ文字は漢語を表記するために必要であった。そこで、漢語の dz を表記するために、デーバ ṅ を変形して用いることとした。なぜならば、仏典において、デーバ ṅ は「惹 ṅ」などのいわゆる日母の漢字によって音訳された。その日母の音訳漢字「惹 ṅ」などは、唐末以降 ṅ→ṅdz のように非鼻音化が進み「惹 dž」のような有声破擦音と見なされるまでになった。そこで、漢語のパスパ文字表記の考案者は、デーバに対応する「惹 dž」などの日母の音訳漢字の音によって、逆にデーバは dž であると推論し、漢語音 dž の表記のためにデーバをパスパ文字の原型として採用したと橋本 1967 は言う。下線部は明示されているわけではないけれども、“From this we can gather that the hP’ags-pa transcriber of Chinese sounds had inferred the sound value of Devanāgarī from its Chinese transcription.” とあるから、まず間違いないであろう

以上を要するに、唐末以降「惹 ṅ」などの日母の漢字は非鼻音化が進み「デーバ ṅ」ではなく「デーバ dž」の音訳漢字として用いられるまでになったという仏典音訳の知識を拠りどころとして「惹」を dž とみなした。ここまでは理解できる。しかしながら、「惹」を dž とみなしたため、かつて「惹」で音訳されたデーバまでも ṅ ではなく dž であると考えた、というような誤解が起こるものかどうか疑問として残る。残るのではあるが、このような誤解を前提としないかぎり、漢語の dž とデーバを結びつける橋本説は成立しない。

つぎに、古漢語 tsh を表記するためにデーバ dž を用いることとした経緯は次とおりである。北方の漢語にあっては、有声音は唐末あたりから無声化が進み、元代では、平声という声調を持つ場合は無声帯気音となり、それ以外の声調では無声無気音となった。そのためデーバ dž は漢語の無声帯気音に対応する文字として認識されるようになり、漢語 tsh に対応するパスパ文字の原型として採用されたと橋本 1967 は言う。しかしながら、どうも腑に落ちない。この説明からは、無声帯気音の漢語 tsh を表記するために、どのような手順を経てデーバ dž を選択したかということが見えてこない。考え得る手順

としては、先ずは無声帯気音の tsh もしくは tšh の枠組みに収まる音訳漢字を探し、それに対応するデーバナーガリー文字を候補とするということであろう。そのような手順を踏むとなると、無声帯気音の音訳漢字としては「車 tšh」や「磋 tsh」などを候補としてあげるのがふつうである。ところがこれらの音訳漢字はデㄗ dž ではなくデㄗ tšh に用いられ、デㄗ dž にはたどり着かない。

そこでデㄗ dž の音訳漢字として何が使われているかをみると、有声音の平声字（後に無声帯気音となる）が用いられる例は稀であり、ふつうには禪母字や日母字が用いられる。いまデㄗ dž とデㄗ ñ の音訳漢字を、羅常培 1932 により整理すると以下のようになる。なお先に述べたように、羅常培 1932 によると仏典の漢字音訳の法には概略二種類あるという。北天系の訳経僧によるものと、中天系の訳経僧によるものである。この音訳法の差異は、中天系から北天系へという時代差の反映でもあるという。

	デㄗ dž	デㄗ ñ
.....		
中天系	禪母字 日母字（一部）	日母字
.....		
北天系	日母字 従母字(一部)	娘母字

デㄗ dž の音訳漢字は、中天系では「闍・社」など禪母字（恐らく ž）から選び、北天系では「惹・若」など日母字から選ぶという行きかたが主流である。もっとも北天系の訳経僧（不空、慧琳、空海、惟浄など）のなかで、慧琳は従母字の嗟（中古音 dz の平声、北方の元代音で tsh）を用いる。問題のパスパ文字 𑖇 tsh を作るに当たり、慧琳のような音訳方式によったとするならば、音訳漢字「嗟 dz→tsh」からデㄗ dž を求め、そしてデㄗ dž からパ𑖇 tsh を作ったとすることも不可能ではない。しかしながら、デㄗ ñ との関係視野に入れるならば不都合なこととなる。それというのも、北天系は、デㄗ ñ の音訳漢字に日母字「惹 ñ」ではなく娘母字「娘」を使う。先に述べたことであるが、日母字を使って始めて漢語音 dz を表記するためのパスパ文字の原型としてデㄗ ñ を選択することが可能となる。娘母字では都合が悪いのである。もっとも、パ𑖇 dz は中天系の日母の音訳漢字「惹」を糸口とし、パ𑖇 tsh の方は北天系の従母の音訳漢字「嗟」を糸口としたということならば一応スジは通る。通るけれどもお互いを繋ぐ糸はあまりにも細い。橋本説が成立する可能性は小さいと言わざるをえない。

最後のㄗ tš であるが、音訳漢字としては「遮、者、左、撈」などの章母字（tš）や精母字（ts）が用いられる。漢語音 ts に対応するデーバナーガリー文字としてㄗ tš を候

補とすることに問題はない。しかしながら、字形の上で、デヂ tš は𑖇に似ておらず、両者を直接結びつけることには困難を覚える。

種々問題はあっても、パスパ文字とデーバナーガリー文字とは確かに字形が似ている部分があり、その点で依然としてデーバナーガリー文字利用説には魅力がある。

五

次に中野美代子 1971 がある。中野 1971 は、パ𑖇 dz、𑖇 tsh、𑖇 ts の文字の由来を、チ𑖇 dz、𑖇 tsh、𑖇 ts に対応するデヂ dž、𑖇 tšh、𑖇 tš に求めた。その述べるところを引用すると次のようである。[] は吉池注。

「パスパが文字をつくるさいには、歯茎口蓋音 [tš,tšh,dž] を表わす字母 [𑖇 tš、𑖇 tšh、𑖇 dž] はチベット文字 6、7、8 [𑖇 tš、𑖇 tšh、𑖇 dž] をモデルにしなが、歯擦音字母 [𑖇 ts、𑖇 tsh、𑖇 dz] については、チベット字母の 6、7、8 [𑖇 tš、𑖇 tšh、𑖇 dž] と 24、25、26 [𑖇 ts、𑖇 tsh、𑖇 dz] の字形上の類似を避けるため、デーバナーガリー文字の 6、7、8 [𑖇 tš、𑖇 tšh、𑖇 dž] をモデルとしたのである。ただし、パスパ字母の 25、26 [𑖇 tsh、𑖇 dz] とデーバナーガリー文字の 7、8 [𑖇 tšh、𑖇 dž] とはたがいに入れかわっている。これは、パスパの誤りではなく、パスパ文字を実際に運用するときにモンゴル人が犯した誤りであろう。なぜなら、モンゴル語には歯擦音 [ts,tsh, dz] は存在せず、パスパ文字モンゴル語文書にみえるこのグループの字母は、すべてシナ語起源のいわば外来語を写す場合にのみ現れるからである」(98 頁)

チベット僧パスパは、デヂ dž よりパ𑖇を、デ𑖇 tšh よりパ𑖇を、デヂ tš よりパ𑖇を作った。しかしながら、音声として dz,tsh,ts を持たないモンゴル人が、これらの文字を運用する際に、𑖇(dz)と𑖇(tsh)の音を入れ替えてしまったため、𑖇 tsh、𑖇 dz とし定着したという。

デーバナーガリー文字		パスパ文字		モンゴル人の運用
𑖇 dž	→	𑖇 (dz)	→	𑖇 tsh
𑖇 tšh	→	𑖇 (tsh)	→	𑖇 dz
𑖇 tš	→	𑖇 (ts)	→	𑖇 ts

たしかにデヂ dž とパ𑖇 (dz) はそっくりである。上記はそれを利用した論であるが、デ𑖇 tšh とパ𑖇 (tsh)、デヂ tš とパ𑖇 (ts) が似ているかどうかコメントのしようがない。両者を直接結びつけることには困難を覚えるというのが正直なところである。提案として興味深いものであるけれども、パスパ文字の字形𑖇 dz、𑖇 tsh、𑖇 ts の由来については引き続き検討が必要であろう。

六

これまで二つのデーバナーガリー文字利用説を紹介してきたけれども、私に誤解がなければ、橋本説と中野説の両説は共に、羅常培 1932 で提出されたデーバナーガリー文字とパスパ文字の字形を比較しているように見える。少なくとも過去のデーバナーガリー文字の実例を挙げることはしていない。デーバナーガリー文字の資料は 10 世紀頃まで溯るとされるけれども（注 7）、元代及びそれ以前の資料により字形の子細を確認する必要がある。

最後に、**𑖃 dz**、**𑖄 tsh**、**𑖅 ts** の字形の由来を検討するにあたり一つ考えを提出しておきたい。**𑖃 dz** と **𑖅 ts** を見ると、互いの文字の構成に大差はない。両者の違いは、**𑖃** は角張った字形で、**𑖅** は丸みを帯びた字形というところにある。そうであるならば、**𑖃** の一部を丸くして **𑖅** を作った、あるいは **𑖅** の一部を角張らせて **𑖃** を作った、というような派生関係を考えて良いかもしれない。これは奇抜な考えではなく、パスパ文字の文字セットのなかにしばしば見られることである。いま初頭に掲げたパスパ文字の一覧表により、既存のパスパ文字の一部を変形し新たに別の文字を作ったと考えられる例を挙げると、**𑖁 b** と **𑖂 p'**、**𑖃 h2 暁** と **𑖄 h1 匣**、**𑖅 f1 奉** と **𑖆 f2 非敷**、**𑖇 s1 禪** と **𑖈 s2 審**、**𑖉 y1 喻** と **𑖊 y2 幺** となる。それで、**𑖃** と **𑖅** の間にも同様の派生関係を認めるとして、問題はどちらが原型かということである。パスパ文字は、総じて方形であるという特徴をもっており、チベット文字に基づき、その丸みを帯びた部分を方形に変形し作ったと見て大過ない。したがって、特別な理由がなく、どちらが原型であるか甲乙付けがたい時点では、先ずは方形の **𑖃** を作り後にそれを変形して **𑖅** を作った、という「見通し」を持ってよいであろう。方形のパスパ文字から円形のパスパ文字が派生した例として、**𑖁 b** と **𑖂 p'** がある。この両者の派生関係はほぼ明らかであり、**𑖂 p'** は **𑖁 b** の一部に丸目を付けて作ったとみてまず間違いない（注 8）。また、**𑖅 ts** は、モンゴル語や北方漢語からみると、子音の二項対立の枠組みから外れるものである。このような子音字が後から派生によって作られたということは有りそうな話である。

さて、橋本説でも中野説もデーバナーガリー文字の **𑖃 tš** からパスパ文字の **𑖅 ts** を作ったとするわけであるが不都合なことに両者の字形は似ていない。**𑖃** から **𑖅** が作られたと仮定するならば、**𑖅 ts** と **𑖃 tš** を結びつける必要はなく、したがって字形上の不都合もなくなる。この考えを、先の中野説に応用すると、次のようになる。

デーバナーガリー文字		パスパ文字		モンゴル人の運用
𑖃 dz	→	𑖅 (dz)	→	𑖅 tsh
𑖃 tšh	→	𑖃 (tsh)	→	𑖃 dz
		↓ 派生		
		𑖅 (ts)	→	𑖅 ts

𑖃 dz から **𑖅 (dz)** が作られ、𑖃 tšh から **𑖃 (tsh)** が作られた。さらに **𑖃**

(tsh)の一部を丸くしバ𑖇 (ts)を作った。デ𑖇 dz とパ𑖇 (dz)の字形は確かに似ている。問題は、デ𑖇 tsh からパ𑖇 (tsh)を作ることができるかどうかという一点に絞られる。

現在の段階で中野説を積極的に受け入れるわけではないけれども、これからどのような案が出てくるにせよ、「𑖇と𑖇の間に派生関係がある」（おそらくは𑖇→𑖇であろうが、𑖇→𑖇の可能性も無いわけではない）という考えを認めるならば、文字の比定は二つで済む。この考えは今後の作業の行方をいくらか左右することになるかもしれない。

注

- 1) このローマ字翻字は「言語文化接触に関する研究」（2000年3月24日。アジア・アフリカ言語文化研究所）という研究会において配布した案に修正を加え「パスパ文字の字母表」（『KOTONOHA』37号、2005年12月）として公表したものである。
- 2) 橋本萬太郎 1967, The hP'ags-pa transcription of Chinese plosives, "*Monumenta Serica*", 26, pp.149-174。『橋本萬太郎著作集第三卷音韻』（内山書店、2000年）所収。
- 3) 中野美代子 1971, 『砂漠に埋もれた文字—パスパ文字のはなし—』塙書房、1971年。
- 4) 服部四郎 1946, 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂、昭和21年。
- 5) 羅常培 1932, 「梵文顎音五母の藏漢対音研究」『中央研究院歴史語言研究所集刊』（第三本第二分）。『羅常培語言学論文選集』1978年所収。
- 6) ただしデ𑖇 dz に対しては主に日母字が用いられ従母字 dz は少数。
- 7) 「デーバナーガリー文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂、2001年。622頁参照。
- 8) 服部四郎 1946 の 68 頁参照。